特集　韓国併合一〇〇年・安保改定五〇年③

# 検閲されたペンフレンドからの手紙

坪井あき子

数年前、古い手紙類を整理していたら、奇妙な封筒が眼にとまった。

色あせた小型封筒の下部に、黒い英字が浮いたセロテープがはってある。

敗戦後、四、五年たった頃のもの。当時、十代半ばの私が、ペンフレンドとかわしていた私あての封書だ。

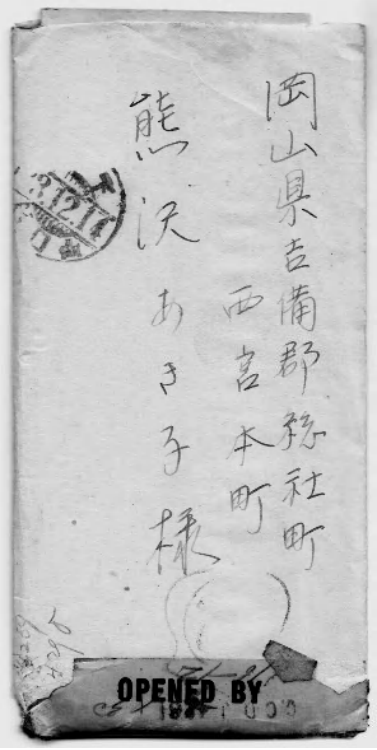
先日、竹内和夫先生が「戦後、進駐軍がやってきて、封書を検閲していた時期があった。私も、外国から来た手紙を読むアルバイトをしたことがある」と言われ、「あ、あの封筒も」と思い、あらためてとり出して見た。

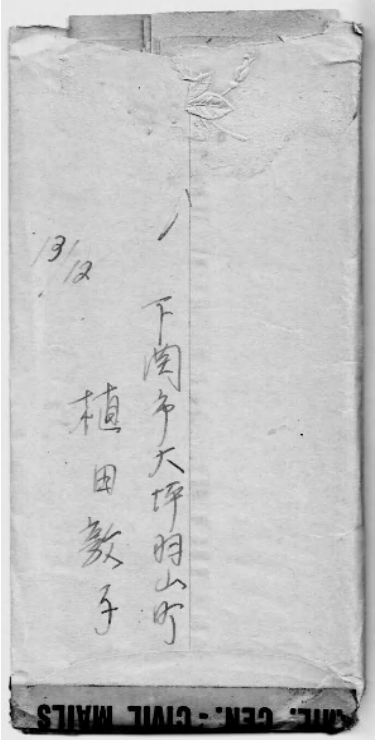
文学少女だった私が、少女雑誌に詩などを投稿していて、その中で「趣味」が同じ少女と手紙だけの交流をしていたのだ。相手は下関市に住む植田敦子さんという。手紙の内容は、学校生活のこと、読書のこと、文学のこと……とりとめのない少女のおしゃべりである。私も同じような手紙を植田さんに送ったのであろう。開封されて、だれかに読まれている、などとは夢にも思わず……。

おたがい、おとなになる前に交流はとだえてしまったが、植田さんはその後どのような人生を歩んだのだろう。少々虚弱だった印象があるが――一度だけ、岡山で会って写真をとっている――生存されているのだろうか。私の手紙はどこでどうなったのだろう。ひととき、はるかな世界に私の心はとんでいった。

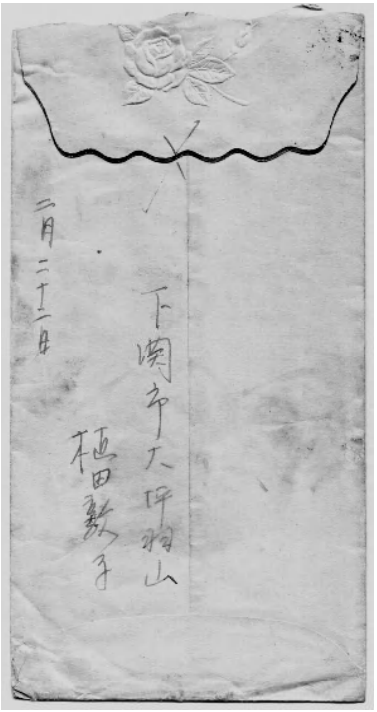
これらの手紙は「占領軍」の支配意識の一つの証明であろう。その占領意識が、いまも続いているのでは――と思わせることも多い二一世紀初頭である。

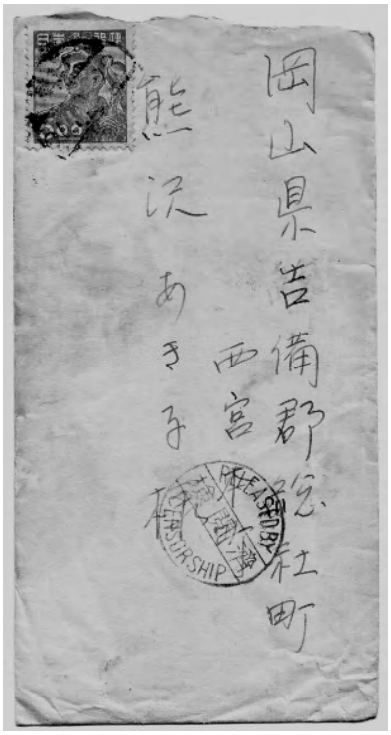
（つぼい　あきこ）

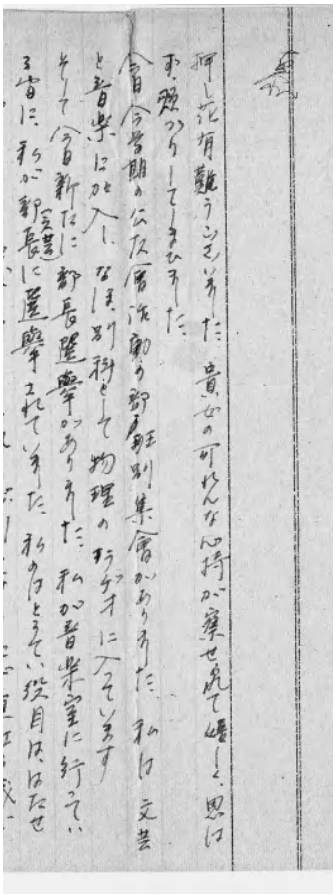
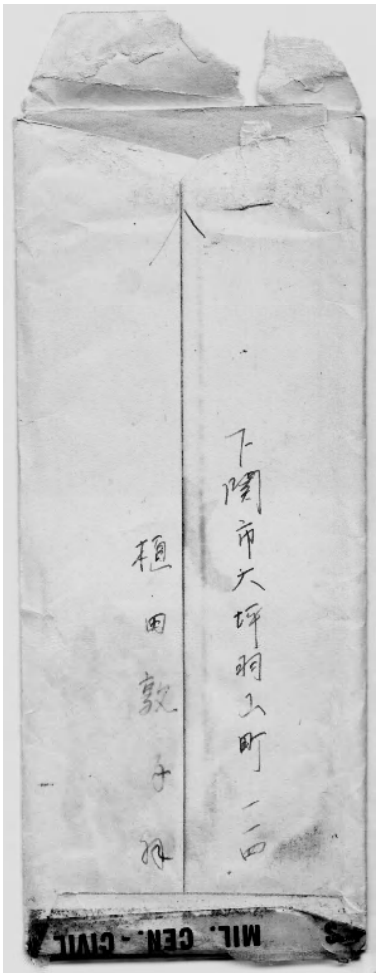


検閲されたペンフレンドからの手紙



←

↓